アートミーツケア学会 News+Letter
Vol.5 2009 Autumn

CONTENTS

特集　暮らしのかたち——“つながり”を考える
松本 篤　マキ クニヒコ　山崎 竜二　渡邉 あい子　渡辺 久美

エッセイ　「影踏むばかり」によせて　大石 晶子
レポート　2008年度大会「呼吸する〈からだ〉と〈こころ〉」　川上 真生子
インフォメーション　2009年度大会のご案内　入会のご案内

Photo:芝の家の縁側にて © 渡辺 久美

アートミーツケア特集

暮らしのかたち——“つながり”を考える

近所に住むおじいさんやおばあさんと挨拶を交わす子ども——一昔前は当たり前だったそのような光景を、みかけることは少なくなりました。少子高齢化による核家族化が進み、家族のかたちも大きく変わりつつあります。世代をこえて交流を持つということも少なくなり、地域においても家々が互いに孤立してしまっているように思います。
しかし、人の暮らしは、人々のなかにあるもの。どの年代の人にとっても、コミュニティのなかで暮らしている、という実感を持つことが、あらためて、必要ではないでしょうか。ここでは、いくつかの実践を通して地域・世代・交流をテーマに、つながりのなかで暮らすということについて、考えたいと思います。

映像がつなぐ記憶・ヒト・地域

AHA![Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]の実践

松本 篤　remo メンバー、大阪大学大学院人間科学研究科前期博士課程

「押し入れに眠る8ミリフィルム、最後に見たのはいつですか？」そんな呼びかけで、家庭に眠る8ミリフィルムを発掘・公開し、そのデジタル化や活用を実践しているAHA(アハ)!というグループがあります。そのメンバーの一人、松本篤さんに伺いました。

AHA!の取り組み

AHA!は、個人によって記録された映像やそれにまつわる記憶を、知的財産として活用することをめざした取り組み。2005年から大阪市内で開始し、現在は20～30代のアーティスト・研究者・デザイナーなど、それぞれ異なる立場の人がそれぞれの問題意識をもって関わっている。

「個人によって記録された映像のなかでも、まずは“8ミリフィルム”という映像メディアのアーカイブ<収集→公開→保存→利用>に取り組みはじめました。8ミリフィルムは昭和30年代以降、映像史上はじめて一般家庭用に普及した映像媒体。当時の生活文化を知る上ではとても貴重な映像資料なんです。しかし、メディアの革新によって現在ではまったく利用されていないため、その多くが数十年間押入れや倉庫のなかで死蔵・劣化しています。そこで私たちは8ミリフィルムのアーカイブをはじめました」。

8ミリフィルムをアーカイブするプロセスのなかでも、現在は特に<収集→公開>の過程に力を入れている。具体的には、<収集>過程としての“出張上映会”、<公開>過程としての“公開鑑賞会”といった、互いに性格を異にする上映会を行っている。

見えないものを、見るということ

「出張上映会は、地域の回覧板や口コミを通じてフィルムの提供をよびかけます。『ウチにあるよ』という声をいただくと、8ミリフィルム映写機・映写技師・聞き取り役が提供者のご自宅にお邪魔して即席の上映会を行います。聞き取り役は撮影年月／撮影場所などの基本的な情報だけでなく、映像が触媒となって引き出されたエピソードや感想など、記憶の断片を丹念に聞き取り、専用のシートに書き留めていきます」。

はじめての出張上映会は麻雀店だった。そこには沢山の8ミリフィルムが眠っていた。ご主人が撮った映像を数十年ぶりに見るので、息子家族や親戚の方も集まった。

「昔は理容店を営んでおられて、ご主人も理容師でした。しかし、ベーチェット病という難病を発症されてからは、しだいに目が見えなくなり仕事も辞められた。8ミリフィルムで撮ったお子さんの成長記録もその頃からなくなりました」。

ご主人はわずかな輪郭程度しか映像を認識できないので、当日はスクリーンに一番近いところに座ってもらった。奥さんもご主人と一緒に座り、映像の説明をご主人やスタッフたちのためにしてくれた。

「新婚旅行で伊豆に行かれた際の山登りの映像を上映していた時です。それまでは奥さんの説明に耳を傾けておられたご主人が、急に『あの時の山登り！作ってもらったおにぎりの味が今でも忘れられへんなぁ』と笑いながらおっしゃって。おにぎりを食べているシーンはどこにも映っていなかったけど、ご主人の頭の中に広がっている景色が映像として見えたような気がしました」。

単にスクリーンに映っている昔の映像を見ているだけではなく、映像にまつわるヒトの記憶も見ている感覚。見えないものが、見える瞬間。それが“映像を触媒にした場づくり”に奥行きを作ってくれる、という。

誤読、が引き起こす豊かさ

出張上映会でお預かりしたフィルム映像を公開するのが、公開鑑賞会。

法事に呼ばれ、料亭で出張上映会を行った時の出来事が、今の公開鑑賞会につながっている。

「親戚一同が集まる席。お孫さんが故人である自分のおじいちゃんの若い姿、動いている姿に触れる。若い世代にとっては『懐かしい』というよりは『驚き、衝撃』に近いようでした」

また、法事の会場になっている料亭の方が身を乗り出して映像を観賞されていた。

「なぜ、そんなにまじまじと見ておられるのだろうと伺うと『昔からこのご家族はウチをご利用されていたので、ウチの先代や建て替え前の料亭が映っていたんです』とおっしゃったんです」。

見るヒトが撮影者の意図しないところで思い思いにその意味や楽しみ方を見出していた。この“誤読”とも言える営みが、豊かだと思った。

「同じ1つの映像を見ながら、フィルムの撮影者・その家族・地域の人・遠来の人など、老若男女がそれぞれのエピソードを語り合ったり聴いたりしている。それぞれ違う映像を見ているように。この豊かさこそ、公開鑑賞会の本質だと思いました」。

“誤読がうむ豊かさ”は、ファシリテーターと呼ばれる鑑賞会を運営するスタッフによって最大限に引き出される。一人が司会進行役。残りのスタッフは参加者と掛け合いをしながら、参加者の思い出したことや感想をマイクにのせて拡声させる役。最初は、提供者に語り部として映像の解説をしてもらう。すぐに他の参加者の方から声が挙がる。映像のなかの子どもが持っていた千歳あめ、ウチの子もおんなじのもらってたわあ、と自分の子どものことを語りだす。その声をマイクで拾うと、あっという間に会場のそこかしこで、語りが展開されていく。

「ファシリテーターは、マイクで声を拾うことだけが全てではありません。場合によってはマイクをはずして参加者とお話しすることもあります。つまりファシリテーターの役割は、その場をつなぎ替えたり、つなぎ直すことによって、語りの中心を移動させることなのです。点と点だったものが線になり、線が面になっていく。語りの輪が重なりながら増え、飛び火する。話が脱線することもありますが、それは映像がヒトの記憶に作用した結果そのものなんです」。

上映する映像、その映像にまつわる語り部のエピソード、その場に居合わせたヒトが想起する記憶。いろんな要素が互いに触れ合うことによって、その場にダイナミックなうねりが起きるのだ。

AHA!は公開鑑賞会に向けた下準備も欠かさない。映像の下見はもちろん、当時の時事ネタを収集したり、進行シナリオを作成したりするなど、メンバー間でのイメージを綿密に共有する。

「でも、筋書き通りになったことは一回もありません(笑)。ファシリテーターがみずからその場を誘導しているはずなのに、参加者がおのずから流れをつくって誘導してくれるんです」。

AHA!の意図を超えたズレや偶然さえも、その場がさらに活性化するための触媒になるのだ。

映像がつなぐ記憶・ヒト・地域

<収集>過程としての出張上映会、<公開>過程としての公開鑑賞会。AHA!の一連の取り組みが、地域福祉の観点から活用されることもある。2007年からは大阪市の“浪速区地域福祉アクションプラン”として、浪速区役所や社会福祉協議会、地域住民からなるプロジェクトのメンバーとして、地域に眠る8ミリフィルムの収集と上映の手伝いをしている。

「現在の浪速区が抱える問題は“住民同士の孤立化”。単身世帯の増加や低い定住性、それにつながり意識の希薄化がその背景にあります。その孤立化をくいとめるきっかけとして、何か特別な仕掛けができないか、というご相談をいただいたんです」。

区内のそれぞれの地域から預かった映像を巡回しながら公開するうちに、従来の地域福祉活動ではアプローチできなかった若い世代など、新しい参加者を取り込むことができた。また、異世代・異地域間の交流の場にもなった。

「地域のおじいちゃんと小学生の間で映像を見ながら掛け合いがはじまったり、長年同じ地域に住み続けた方が、隣の地区に関心をもつようになったり。単に映像を通じて『懐かしい』で終わらないような、いろんな可能性を感じました」。

しかし、こうした可能性を着実にかたちにし、継続した活動にしていくためには、ハード面とソフト面の両方の整備が必要と感じている。具体的には、1)地域内でのアーカイブの仕組みづくり。例えば、地域の公共財として図書館に保存・貸し出ししてもらう仕組みをつくること。また、2)その仕組みを支える人材の育成。例えば、地域内で鑑賞会のファシリテーターを養成すること。以上の2つは、AHA!を地域で根付かせていくための今後の課題になるだろう。

映像を介したローカルなコミュニケーション

「公開鑑賞会で上映する映像を選ぶ時、提供者は『これ見て、他人がおもしろがるか？』とまずおっしゃるんです。でも、鑑賞会の場で映像の価値がどんどん変わっていく。最後には『君たちがやりたいことがわかった』と提供者も参加者もおもしろがってくれます」。

時間・空間・シチュエーションを少しずつズラしていくことで、映像の価値もズレていく。個人的な記録物であるはずの映像が、それにまったく関係のない人の記憶に触れ合い、何かが想起される。すると、同じ1つの映像でもいろんな意味が帯びてくる。その作業を丁寧に繰り返すことで、いろんなものがゆっくりとゆるやかにつながっていく。AHA!の真骨頂が、ここにある。

「映画やテレビ、インターネットなど、映像を介した現在のコミュニケーションの多くは『より大きく、より遠くに』と、まさにグローバル化の極みです。そんな世の中だからこそ、限定されたコミュニティーやローカルな場にしか偏在しない知を『より小さく、より近く』に、楽しみながら伝えていく回路が必要だと思うのです」。

AHA!の場づくりは、ヒトの記憶を媒介とした“映像のあり方”を根源から問い直す、一種の遊びのようにも思えるのだ。

聞き手：井尻貴子

AHA!：Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ
個人によって記録された8ミリフィルムなどの映像メディアを収集・公開・保存・利用するまでの一連の仕組みづくりを推進するデジタルアーカイブプロジェクト。
remo：NPO法人記録と表現とメディアのための組織
“映像を囲んだ場づくり”のあり方を提案・実践・研究する団体。2002年から大阪市内にて設立。AHA!はremoのプロジェクトの1つとして2005年から活動を開始。
http://www.remo.or.jp

言葉では説明できない場のおもしろさ

マキ クニヒコ　大阪府若者サポートステーションのコーディネーター

「8ミリフィルムの上映会があるんだけど行ってみようよ」。
と誘って連れて行った知り合いにとって、「なにわの日／8mmフィルム鑑賞会」は、驚きの連続だったようだ。

「8ミリ映写機からではなく、パソコンに取り込んだ映像を流している！」。

「マイクを持った人がたくさんいて、なんか話しかけてくる！」。

「映像と関係ない話題でみんな勝手に盛り上がっている！」。

無理もない。その知り合いが想像していた上映会というのは、8ミリ映写機で上映をし、フィルム提供者が時折解説を挟み、昔を懐かしむ人や映像に興味のある若者たちがうなずいたり驚いたりしながら静かに鑑賞するものであったのだろうから。

高島屋デパートの屋上の映像から、近くにあったダンスホールの話へ、当時流行したダンスや服装、よく飲んだカクテル……。

映像をきっかけにポロリとつぶやいたおじさん・おばさんをスタッフたちは見逃さず、詳しく話を聞きだす。すると、はじめはひかえめだった人でもいつの間にかスタッフが持つマイクを奪って話すようになり、意外な方向に話題が転がっていく。そんな現象が会場の四方でおかまいなく展開されているのに心地良い一体感があるのは、中心のスクリーンに無音で繰り返し映し出されている8ミリ映像があるからだ。

「え、それはいつ頃のことなんですか？」「つい最近」と、何十年前のことでも「つい最近」と連発して笑いをまきおこしていたおばさん。決してウケ狙いでなく、それくらい鮮明に記憶が蘇ってるんだろうなぁ、とつぶやきながら知り合いも笑っていた。この上映会の場がもつおもしろさは言葉では説明できない。騙されてでも一度足を運んでみなければ。

まき・くにひこ　ヒューマントキュメンタリー映画祭の事務局をしていた経験を活かし、就労困難層の若者を巻き込んだ上映活動を通して町の『地域力』をアップさせるプロジェクトを夢想中。神社に佇む狛犬のような存在を目指した音楽ユニット「コマイナーズ」でも活動中。

子どもと臨床する認知症ケアの冒険

山崎 竜二　北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士後期課程

石川県能美市で2006年度から世代間コミュニケーション・プロジェクトを進めています。高齢者の増加を契機に認知症の予防をテーマとした行政との連携からスタートしました。社会福祉協議会、高齢者支援センター、子育て支援センターなどの多くの方々から協力が得られ、市内各地で0歳から100歳を越える人たちが集まる交流の場が設けられてきました。

そのなかの一つに高齢者の通所教室と未就学児・保護者の教室がジョイントするプログラムがあります。保育園児が太鼓の演奏を披露したり、未就学児も高齢者もリズムに合わせて身体を動かしたり、高齢者が童謡を聴かせたりします。さまざまな戯れや交歓があり、そうした出会いのなかで子どもが高齢者を力づけたり、高齢者が子どもを見守り、手助けしようとしたりする様子が窺えました。

そこで現れていた子どもと高齢者の姿は、ただ世話を受けるだけの庇護や許容の対象であることを超えたものであったように思います。子どもの保護者からは「おじいちゃん、おばあちゃんへの接し方としては、やはり知らない人なので距離をおいている感じだった」といった感想がある一方で「親からだけでは学べないこと（昔の遊びや歌、年配の方との接し方など）が多く学べるので、貴重な体験だと思う」といった感想が寄せられていました。

現在、私たちは毎年小学校4年生を対象とした活動を中心に進めています。学校と地域、高齢者施設のあいだを断絶させることなく、つながりのある社会の実現へ向けてモデルとなる地域の仕組みを築こうとしています。子どもたちが介護老人保健施設へ行ったり、入居しているお年寄りを学校に招くこともあったりします。子どもたちが施設を訪問した際には全員で演奏をして歌ったり、各班で色塗りや手遊びをしたりしながら個々に話をしていきます。児童からは「楽しかった」「喜んでくれて嬉しかった」といった声が多くある一方で「お年寄りとお話をするとき何を言ってあげればいいかわかりませんでした」という意見もありました。子どもたちが手を握っただけで泣いて喜んでくれているお年寄りがいて「なんでかわからなかった」と体験を振り返っていた子どももいました。あなたはただいるだけで価値がある、そうした評価を受けるのは馴染みのないことだったのではないでしょうか。

どこの施設でも認知症の重度化が見られます。相手の言うことがわからないままにそれでも関わろうとする意志をもつことはどのようにして可能でしょうか。そうした共にあるための知を見出すことが求められているのを強く感じます。

今、世代を超えた魅力的な関係づくりを課題に据え、互いに異なる誰もが出会いに喜びを見出すことのできる関わり方を探ろうとしています。そのための手法として関心をより合わせていくところに思い出の創作劇が生まれる、一種のドラマツルギーを用いています。

なんといっても楽しさがなければはじまらないので、子どもたちは自分たちで意見を出し合い、学校に地元の高齢者をお招きして興味のある話を聴いていきます。今年度はテーマの候補に学校や遊び、仕事、自然、戦争の頃の生活など数十個が挙がっていました。例年、村自慢や蘆のある暮らしに関する話を聴き、いっしょに縄綯いをしたり博物館を訪問したりします。夕飯の話になると子どもたちは、お米とは機械から出てくるものだと言っていましたが、お年寄りの方々は年間を通じて作物が育つ過程を伝えたいと話していました。地域探検で昔は遊び場だったという近くの神社を訪れることもあります。子どもたちの目に鎮守の森はどのように映るのでしょう。

ドラマのなかで他の人との関わり方、その身体知を探ることと併せて、どのような世界観が表現されうるのかと思いをめぐらせます。そうした二重の視線のなかで、自分の身体が世界のなかにあるのは心臓が有機体のなかにあるのと同じだという哲学者の巧みな言葉が脳裏に浮かびます。

やまざき・りゅうじ　中央大学大学院哲学専攻博士前期課程で現象学を学び、北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士後期課程で認知症ケアの研究に携わる。M. メルロ＝ポンティの身体論から E. フッサールの時間論へと遡行して、絶えず〈いま・ここ〉からはじまる現象学的思考に魅了されてきた。〈わたし〉・共同体のあり方というテーマを問い進めるため、老いるということが問題となる場面へと身を投じている。フィールドワークの手段に回想法を用いてグループホーム（認知症対応型共同生活介護）等々の現場に臨み、共生社会のモデル構築、そして生体情報に基づくコミュニケーション支援の可能性や介護現場への情報技術導入の倫理的課題などの探究に取り組んでいる。

週末、そこにだれかいる道草

渡邉 あい子　立命館大学大学院先端総合学術研究科 博士後期課程公共領域

中島くん、というひとがいる。彼は自閉症だ。彼と私は京都・山科にある作業所の利用者ともと指導員という関係で、いまはともに「めくるめく紙芝居（通称MEK）」という集団の一員である。MEKは京都山科を拠点に大人の知的障害者、アーティスト、学生、ヘルパーと、その他説明しきれない属性の人が集まって、紙芝居を中心とした音楽やダンスなどのワークショップ（以下、WS）／パフォーマンスをする集団である。その起源を掘り起こすと長くなるので割愛するが2006年からゆるやかなWSを重ね、活動、発表をしてきた。山科別院長福寺本堂での公演は、今年5月で3回目を迎えた。中島くんと私には、このMEKが変化の契機になり、すっかり定着した場となった。

参加することになったのもひょんなことからだった。制作担当＆コンダクター的存在のアーティストが、当時私が勤めていた山科の作業所に参加者募集のよびかけとききとりにやってきたのだ。その時、お客さんがくるといつもそうするように、利用者の何人かが持ち前の芸を披露した。中島くんは電車やバスのアナウンス。彼は乗り物に関するなみなみならぬ関心と記憶を持っている。通り過ぎた車も一瞬で車種や年式を判別してしまう。

1度目のMEK公演は、作業所の何人かを引率して見に行った。アーティスト林加奈のはからいによる、飛び入り参加での中島くんの車掌さんパフォーマンスは、拍手喝采をあびた。MEKのメンバーはひどく驚いたようだったけれど、つつみこむ懐の深さがある。ともかく、それが契機となって彼はMEKの一員となり、行く場所がひとつ増えた。2度目の公演から、車掌さんパフォーマンスは定番化している。

ところで中島くんの休日は、とくべつ大きなイベントがないかぎりコースが決まっている。一人暮らしの彼は、朝は決まった時間に起きて、紅茶を入れてトーストを食べる。それから本屋さんで車の雑誌を立ち読みする。お昼はいったん家に戻って何か食べ、午後からは図書館に行き、車や電車の本を眺めたり、京都市地下鉄にまつわるビデオ（があるらしい）を視聴する。夕方にはヘルパーさんが来て、一緒にご飯を作る。という超規則正しい生活。

MEKに参加するようになってから、少なくとも月に一度はこれが変化した。活動の場である京都市山科青少年活動センター（通称やませい）に来て、ギターや大正琴をつま弾いたり、障子紙にたくさんの電車や山の絵を描いたり。終わりの時間が来て解散になると、「○○さん、今日もおわったなー」とみんなにそれぞれ挨拶＆握手をし、おおきく手を振って帰る。その姿はとてもすがすがしい。

先日、MEKの今後の方針や日程決めなどの運営者ミーティングがあった。参加者には知らせていないだんどりの集まりだった。

と、そこへ「こんにちは～」と中島くんはあたりまえかのように現れたのだった。私たちは驚いて、どうしてわかったのだろう、と不思議がったけれど、ミーティングの輪の中にすんなりと入って「やってたなー」と言うのだった。「今日は絵を描いたり音楽しないんだよ」と言うと、「そうかーないのかー」と言うけれど、とくに気に留めない感じで会議が終わるまで座っていた。何か聞かれれば受け答えはするけれど、とくに何かするわけでもなく、ただ、居るのだ。

5月末に公演が終わってからWSはしばらくお休みで、決まったら連絡するからねと伝えてあったのだけど、きっと気になっていたのだろう。馴染んだ週末の身体リズムとして。おそらく、彼は週末、やませいの玄関にある利用表を確認しに来ていたのだ。土曜の夕方、ヘルパーさんとご飯の準備をしたあとの、いつもWSが始まる時間に合わせて。いつものコースに、いつのまにか加わっていたやませいの玄関で、黄色い「紙芝居」のマグネットを見つけ、「やってたなー」だったのだ。そこには、やってるんなら教えてくれよ的感情はこめられていない。ただ、そこに「あった」という感覚だ。

じつは、何をせずとも座っていられる場所、というのは私たちにとっても、あまりないのかもしれない。地域のなかの、気ままな歓待の場所。そういう余白であり、遊びの空間は日常の生活リズムと地続きにあり、例えば、MEKのようなかたちで、ある。中島くんは、「おわったなー、またなー」といつものように手を振って帰っていった。

わたなべ・あいこ　社会福祉士。佛教大学非常勤講師。知的障害者作業所勤務の経験と、元来のアート志向が重なって身体を基盤として捉えるコミュニケーション、アール・ブリュットなど「発露するもの」、それらをとりまく環境について考える日々。つまり修行中。

芝の家のある日――つながりのうまれる場所

渡辺 久美　三田の家スタッフ

今日は月曜、喫茶の日。いいお天気だからと、スタッフが縁側に座布団を干しています。そこへ散歩途中のおばあさんが1人やってきて、縁側に腰掛け、スタッフとおしゃべりをはじめました。いつのまにか、隣のおじいさんと2階に住む大家さんも話の輪に加わって、なにやら楽しそうです。

縁側のある生活を、私は経験したことがありませんでしたが、ちょっと世間話をするのにもってこいの装置なのだということを芝の家にきて知りました。

次にやってきたのは、よく顔をみせてくれるおじいさん。病院へ行ってきた帰りだそうです。私に会うのを楽しみにしているとのことですが、祖父と暮らしたことのない私にとっても、お茶を飲みながら話をする時間は新鮮で大切なものです。

お昼時。オフィスからあふれてくるサラリーマンたちで街がにわかに活気づきます。利用者がお年寄り中心の午前中と変わって、ランチタイムは近くで働く人たちの利用が多く、お弁当持参の人や、食後のコーヒーを飲みにくる人たちで賑わいます。今日は、若い女性もたくさんいるなか、常連おじさまグループの1人が、趣味のウクレレ演奏を披露してくれました。

お勤めの人たちがオフィスへ戻ったあとは、スタッフの食事の時間です。スタッフの昼ご飯は、主に私が作り、できるだけみんなで食べるようにしています。夏休みのあいだは、共働き家庭の子どもたちが一緒に食卓を囲むこともありました。

私たちの今日の昼ご飯は、隣の主婦の方から分けていただいたビーフシチューをソースに使ったオムライス。料理上手な彼女は、「作りすぎちゃったから」と味噌汁やおかずを差し入れてくれたり、逆に「卵足りないのよ。余ってない？」と食材を借りに来たりすることもあります。はじめは目の前で起きているやりとりが、とても現代のこととは思えず、まるでサザエさんのアニメでも見ているような気がしました。いただきものがたくさんあればお裾分けをし、困りごとがあれば助けを求めるということが、都会のど真ん中でも、ごく自然に起きています。

午後2時過ぎ、近くに住むおじいさんと縁側でおしゃべりをしていると、小学生たちが「ただいまー」と学校から帰ってきました。

芝の家がオープンして間もない頃、下校中の子どもたちに「おかえり」と声をかけはじめたのが彼です。知らない子に対してもためらいなく、「おかえりー！」と声をかけるその姿に、私は妙に勇気づけられたのを覚えています。

最初の頃は、家族でもない人から「おかえり！」と言われて、「この人だれ？？？」と戸惑った表情を見せていた子どもたちですが、今では「ただいまー！」と進んで挨拶してくれるようになりました。

日が傾きはじめる頃、植物係のスタッフが子どもたちと一緒に近所の植物の世話に出かけていきました。芝の家では、学生と子どもたちが一緒にゴーヤなどの野菜や朝顔などの花を育てているのですが、種をまきすぎて苗が余ってしまったので、ご近所に「里子」として預かってもらっているのです。

里子に出される植物があれば、里子としてやってくる鉢植えもあり。ガーデニングが趣味の隣人たちから季節ごとに届く立派な鉢植えは、訪れる人の気持ちをほっと和ませてくれています。

さて、スタッフの帰りが遅いので心配していたのですが、うらやましいことに、ゴーヤの里親さんのお宅でお茶をいただいていたそうです。植物たちが、このまちの人たちのコミュニケーションの促進に一役買っているのは間違いないようです。

日が暮れて、近所のお母さんから夕飯の差し入れが届き、お隣さんが夕涼みにやってきました。芝の家の一日がそろそろ終わろうとしています。

芝の家：「芝の家」は、港区芝地区総合支所によるコミュニティ再生事業「昭和の地域力再発見事業」の拠点。昭和30年代にあったようなあたたかい人と人とのつながりの創生をめざして、東京農業大学と連携しながら企画と運営を進めている。
オープンは、2008年10月。月・火・木曜日は「コミュニティ喫茶月火木」と称して、お年寄りや近隣の会社員などゆっくりくつろいだり語り合ったりできる。セルフサービスの喫茶コーナーを開放。水・金・土曜日は。主に小学生向けの遊び場として。毎日にぎわっている。
http://www.shibanoie.net/

わたなべ・くみ　「三田の家」（教員、学生、商店街が共同運営する場）スタッフ。09年より、港区と農業大が共同で運営するコミュニティづくりの拠点「芝の家」に常駐している。芝の家の近くに住み、ご近所付き合いを満喫中。

エッセイ

「影踏むばかり」によせて

大石 晶子 写真作家

私は写真を使った現代美術の作品を制作しています。アートミーツケア学会のことは2008年にはじめて知りました。アートとケアの関係について考えはじめてまだ間もないのですが、興味を持ったきっかけについて書かせていただきます。

家族のこと

私の両親は病気で亡くなりました。入退院を繰り返す両親の付き添いで、私もいくつかの病院に通ったり泊まったりして、長い時間を病院で過ごすということを経験しました。今振り返って思うのは、病院に関わっている間は、物事を冷静に考えることができなくなってしまっていたということです。例えば古くてせまい病院でも、そんなことは目に入りません。今この治療を受けられることが最善なのだと信じようとし、病院に対して不満を持つことは良くないことだと思い込んでしまっていたのです。結果として、親に十分なことをしてあげられなかったのではないかという後悔が残っています。殺風景な個室に入院したこと、地元から離れたポスピスに転院したこと、など。

最後まで人間らしくあること

昨年、滋賀県立近代美術館で森口ゆたかさんのホスピタル・アートについての講演を聞くことができました。

森口さんは、「ガンを宣告された人にとって、壁にどんなに美しい絵がかかっていたとしても、そんなものは見ないかもしれないし、見えないかもしれない。そんな心の余裕なんか、なくて当たり前だと思います。けれども、その人が窓もない、光も射さない、緑もない、アートもない、そんな牢屋みたいな空間で死んでいってもいいのかというと、決してそうではない。仮にその人が一度も壁の絵を見なかったとしても、そこには窓があり、緑があり、アートがあり、考えられた色のカーテンがあり、素材があり、人間らしい環境のもとで、最後まで人間らしく亡くなっていく。それがあるべき姿ではないでしょうか」と話していました。

それを聞いて、私が親にしてあげたかったことはこういうことだったのだと思いました。人が最後を迎える場所は自宅が最善かもしれません。しかし今の暮らしのかたちではそれはとても難しいことが多いのです。自宅にいるようにというのが無理でも、せめて患者のことを思いやった部屋で過ごして欲しいと思います。

そして家族にとっても、病院が心地よい空間であることは重要です。家族には病院にいる時間だけが大切な訳ではないのです。肉親を看取るということには終わりはなく、病院から離れてからも、そこでの経験は何度も思い返すことになります。何をしても後悔は残るのかもしれません。しかし、その背景に素敵な絵があり緑があれば、少しでも気持ちは和らぐのではないでしょうか。

自分の手を動かし、ものをつくる喜び

患者にとって環境とともに大切なのは、病院のなかでどのように時間を過ごすのかということです。母は緩和ケア病棟に入ったとき、リハビリで塗り絵をさせられたことをとても嫌がっていました。安っぽい色鉛筆を使って花の絵を塗るのですが、確かにこれでは情けない気持ちになるだろうなと思いました。母は編み物や刺繍、洋裁を楽しみ、それなりに美しいものに対しての感じ方もあったでしょう。父も退職後竹細工を習いに行っていました。

両親は美術とは関係なく暮らしていましたが、自分の手を動かし、考え、何かをつくり出す喜びは、日常生活の中で誰もがもっていることでしょう。入院すると、ものをつくる楽しみは無くなっていきます。しかし、病気が進行して身体の自由がきかなくなってきてからの方が、その喜びは大きいのかもしれません。リハビリのメニューでも、手を動かす限りは質の高い内容であってほしいと思います。

家族の写真

私はこれまで、印画紙の上に物を置いてその影を写すフォトグラムという手法で大型の写真作品を制作してきました。私という個が何かしら大きな存在に包まれるような、個であり全てであるようなイメージに対して憧れがありました。

昨年の母の三回忌では、葛の葉に古い写真を転写した日光写真の作品をつくりました。大正元年生まれの母方の祖母が残した大量の写真のなかに、祖母や母の幼い頃の写真などがありました。父は空襲で家が燃えてしまったにもかかわらず、子供の頃の写真を数枚持っていました。そのなかには早くに亡くなった父の兄や姉の写真もありました。今はもう亡くなってしまった人たちの若い頃の姿を見るということは、写真でなければ味わえない不思議な経験だと思います。家族写真はその家族にとっては特別なものですが、他人からみればおもしろくはないものです。けれど古い写真には、特定の個人を超えた人々の存在を感じることができます。見ず知らずの他人の写真でも、じっと見続けてしまいます。

植物を使うのは、かつての光がこの像を結んだのだということを、もう一度自然の力を借りて感じるためです。印画紙と違って耐久性はありませんが、いずれ朽ちていくということをあらためて考え、それを受け入れることが出来るのではないかと思っています。

今はデジタル写真が主流なので、写真はたいていコンピューターの中に保存されています。ブログなど、写真を見るという体験には新しいかたちがありますが、光が像を持ってきてくれたという感覚は、あまり感じられなくなっているのかもしれません。

自然によって何かをつくり出すことは、これからも私に大きな喜びを与えてくれると思います。写真を使って作品をつくってきたことと病院での個人的な経験を大切にして、アートとケアのことをこれからも考えていき、病院の先生や看護師さんたちにも、感謝の気持ちを伝えたいと思います。

写真：「影踏むばかり」2008年9月アートスペース虹

おおいし・あきこ／成安造形大学非常勤講師。大型のカラーフォトグラム作品を発表。近作は植物を使った日光写真。像が現れることや現されることの不思議を探求。京都大阪で個展、グループ展を開催。

レポート

2008年度大会「呼吸する〈からだ〉と〈こころ〉」

川上 真生子 東京大学文学部歴史文化学科美術史学専修課程

■日程　2008年12月13日［土］、14日［日］
■会場　アートエリアB1
（京阪中之島線なにわ橋駅地下1階コンコース内）
■主催　アートミーツケア学会、
「中之島コミュニケーションカフェ2008」プロジェクトチーム
■共催　大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

［同時開催］
井上廣子　写真彫刻展「Inside Out 2008　いのちと向き合う」

■プログラム
［1日目］
□基調講演「誰かとともにあるからだ」西村ユミ
□パネルディスカッション「やわらかな身体をつくるアートの力」
志賀玲子／五島智子／清田仁之／播磨靖夫

［2日目］
□プレゼンテーション（研究発表・実践報告）
□分科会1「他者の痛みへの共感」井上廣子／秋田光彦
分科会2「アートが開く身体感覚と他者性をめぐってのワークショップ」水野哲雄
分科会3「美は心・身体・生命をつなぐ」及川麻衣子
分科会4「笑いという生の技術」高橋綾／尾崎日菜子／"珍獣王"山下純一
□まとめにかえて　鷲田清一

地下鉄の轟音が時おり反響する駅空間。2008年度の総会・大会は、さまざまな人々が行き交う駅のコンコースといういかにも本学会らしい会場で開かれた。コンクリートの無機質な空間が全国からの多様な顔ぶれで彩られ、冬を忘れる温かな雰囲気に包まれた。テーマは「呼吸する〈からだ〉と〈こころ〉」。アートとケアが交差する営みについて、実践／研究の立場からさまざまな報告がなされた。

一日目。西村ユミ氏の基調講演で大会が幕を開ける。「誰かとともにあるからだ」の題目で話されたのは、看護の現場で見えてきた看護師―患者間の身体的相互作用について。ともすると患者の身体の一方的な観察・測定、すなわち患者の「モノ化」と思われがちな看護の営みが、実は身体的直感に基づいた相互のコミュニケーションのなかで行われている。植物状態の患者の上に無意識にかがみこんで問いかけを行う看護師の身体等を例に挙げ、他者の存在ありきのケアの営みについて話した。

続いてはパネルディスカッション、「やわらかな身体をつくるアートの力」。介護をアートプロジェクトと銘打つことである種戦略的に異化し、ALS(筋萎縮性側索硬化症)の友人の在宅独居に取り組む志賀玲子氏。「自分が倒れるか相手が倒れるか」の介護の泥沼をダンスの力で抜け出そうと、介護者向けのワークショップ等を手掛ける五島智子氏。そして、障害をオリジナリティに変えるべく、ヘルパー派遣事業に詩の朗読や楽器演奏といったアート活動を取り入れる清田仁之氏。3人の活動に共通するのは「身体の接触」の重要性である。コーディネーター播磨氏の「魂は接触面に生まれる」という言葉が印象的だった。

さて、プログラム終了後は会場が懇親会場に早変わり。参加者は見たところアート畑、ケア畑がほぼ半々で、両者が一堂に会す機会にあちこちで名刺交換の姿が。文字通りアートとケアがミーツした貴重なひとときだった。

大会二日目。この日は全日分科会形式で、午前は3つのブースで事前応募者によるプレゼンテーションが行われた。私が参加した分科会Aのブースは二人による研究報告。まずダンスを研究する渡邉あい子氏からは、障害者の身体を考える基盤としての土方巽の舞踏的身体について。土方の言う「衰弱体」は欧米のダンス史を支配してきたいわゆる「特権的身体」の対極にあり、不自由さを肯定的に受け入れるそうした身体観が障害をもつ身体への尊厳を可能にするのだという。続く中川威氏の報告は、地域福祉における参加型アートプログラムの評価方法について。評価法の確立はアートの重要性を政策的・学問的に裏付けるために不可欠であり、評価法の精緻化が急務とのことだ。他の分科会も興味深い内容で、体がいくつもほしかった。

お昼を挟み、午後にも4つの分科会が設けられた。分科会1は会場の壁を使って写真展「Inside Out 2008　いのちと向き合う」を開催していた井上廣子氏と應典院住職の秋田光彦氏との対談。それぞれの立場から発される言葉にじっと聴き入る参加者の姿が印象的。分科会2は水野哲雄氏による「アートの発生をからだ感覚で確かめる」ワークショップ。絵を描いた大量の新聞紙が床いっぱいに散らばって楽しそう。「絵は描くのではなく、なる」。なるほど、絵は行為の結果なのだ。分科会3は美容学校講師の及川麻衣子氏より、美容の果たす心理的効果について。初対面の参加者とペアを組んでのハンドマッサージは照れくさかったが、温かくて柔らかく、心地よかった。分科会4は高橋綾、尾崎日菜子両氏によるお笑いユニット「ひし形」と、"珍獣王"の異名を持つハーモニカ奏者山下純一氏が登場。トランスジェンダー、盲目……という「障害」を自ら笑う「キワドい」パフォーマンスに戸惑う参加者たち。「笑ったらラクになるよ」という尾崎氏の言葉が強烈に響いた。

そして、締めの挨拶は本学会の会長鷲田清一氏より。アートミーツケア学会の名前の由来となった「アートミーツケア(アート見つけやー)」という関西弁の意味について、アートとケアの関係がforやofではなくmeetsである点に触れたのち、研究者だけでなくアート／ケアの現場も含めた多様な構成員から成るという本学会の意義を再確認された。言葉のプロである研究者に有利に働きがちな「学会」という場。そのなかで非言語的なものにどう向き合っていくか。課題は残しつつも、「おもしろい！」という率直で確かな手応えを手にしながら、総会が幕を閉じた。

かわかみ・まきこ　アートの教育普及を目的とした展覧会企画・映像制作。美術館での学芸員アシスタント等の活動を経て、「東と西のアール・ブリュット展」(2008)で障害のある人の芸術活動に出会って以来、美術史的な作品批評のあり方について考えている。来春からは一般企業に就職が決まっており、自身の活動と両立させる道を模索中。

アートミーツケア学会　2009年度大会「記憶の居場所」のご案内

日程：2009年12月5日(土) 6日(日)
会場：慶應大学三田キャンパス、芝の家、三田の家、ほか

写真家の石内都さんによる基調講演のほか、慶應大学とその周辺の三田のまちを舞台にした、多彩なプログラムを展開します。みなさまのご参加お待ちしています。

○プレゼンテーションの募集

重点テーマとして「記憶」「コミュニティ」をキーワードにアートとケアのかかわりについての研究や実践の報告発表を募集します。また、重点テーマにかかわらず、人間の生命、ケアの現場におけるアートの役割についての研究、またアートの力を広く現代社会にいかしていく実践といった、研究や実践の報告発表を募集します。応募の詳しい内容については、事務局までお問い合わせいただくか、ホームページ（http://artmeetscare.seesaa.net/）をご覧ください。
⇒エントリー期日　10月31日（土）

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。
2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。
3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。
4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。
5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。
6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。
7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般10,000円　学生5,000円
□賛助会員　30,000円

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135
2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

役　員（敬称略）

□会長	鷲田清一	（大阪大学総長）
□副会長	畑　祥雄	（関西学院大学教授）
□常務理事	播磨靖夫	（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事	秋田光彦	（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事	片井　修	（京都大学情報学研究科教授）
理事	グロッセ世津子	（有限会社みどりのゆび代表）
理事	塩瀬隆之	（京都大学総合博物館准教授）
理事	関口怜子	（ハート＆アート空間 Be I 代表）
理事	ダーリング・ブルース	（美術史家）
理事	銅金裕司	（メディアアーティスト）
理事	鳥海直美	（千里金蘭大学現代社会学部現代社会学科准教授）
理事	中川　真	（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
理事	並河恵美子	（NPO法人芸術資源開発機構代表）
理事	本間直樹	（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／大学院文学研究科准教授）
理事	的場政樹	（医療法人直志会袋田病院院長）
理事	見寺貞子	（神戸芸術工科大学教授）
理事	森口ゆたか	（NPO法人アーツ・プロジェクト代表）
理事	森田ゆかり	（金城大学短期大学部講師）
理事	山口悦子	（大阪市立大学医学部附属病院安全管理対策室専任医師）
理事	横川善正	（金沢美術工芸大学教授）
□監事	太田好泰	（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事	三浦久子	（株式会社エイジレスラボラトリー会長）

編集後記

●今回、特集「暮らしのかたち―― "つながり" を考える」を担当しました。これは、一人暮らしをはじめて3年になる私にとって、いまだ実感できていないことでもあり、その重要性を再確認することにもなりました。みなさんは、暮らしのなかで「つながり」を感じる瞬間はありますか？（井尻）
●12月の大会は東京・慶應大学で行います。今回の表紙の「芝の家」も会場の一つとなります。ぜひ、芝の家の縁側を楽しみにいらしてください。（森下）

アートミーツケア学会ニュースレター
Vol.5　2009年10月5日発行
発行　アートミーツケア学会　http://artmeetscare.seesaa.net/
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4　財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501　E-mail.art-care@popo.or.jp